

## 世界共通、手話の「I LOVE YOU」イラスト付きお墓が対象

### 「第24回 想いを込めたお墓デザインコンテスト」の結果発表

「お参りする場所が欲しい」との娘さんの一言で、お墓づくりを決心したエピソードも

聴覚に障害を持つ夫と、二人三脚で寄り添ってきた健常者の妻。親指と人差し指、小指を立てた手話の「アイラブユー」のイラスト入りのお墓に、「忍」の彫刻。LINEのスタンプでも知られている「アイラブユー」メッセージと「忍」は、様々な苦労を二人で乗り越えてきた夫婦愛と絆を強く印象付けるお墓となっている。

神奈川県横浜市の前田房代さんのお墓が、「第24回 想いを込めたお墓デザインコンテスト」の「ニューデザイン大賞」を受賞した。決して高額なお墓ではなく、ごく普通のお墓だが、「手話イラスト入りお墓」はちょっとした創造性、メッセージを付け加えることで、「感動」を与え个性的なお墓となっている。夫は大手企業を定年退職したが、妻は高校の授業で手話を教え、夜は手話の講習会で指導にあたっているという。



「想いを込めたお墓デザインコンテスト」は、北海道から沖縄まで、全国の優良石材店約300社によって構成する墓石業者の全国組織「全優石」（正式名称：一般社団法人 全国優良石材店の会、会長：吉田剛、事務局：東京都品川区上大崎3-8-5）が実施したもので、今年で24回目。新しいデザインのお墓、个性的なお墓、オリジナルのお墓など想いを込めたお墓の写真を全国規模で公募した。応募資格はお墓の所有者かその家族、または家族の了解を得た石材店という限定付き。審査の上、ニューデザイン大賞1名、ニューデザイン特別賞2名、ニューデザイン賞17名が決定した。審査はお墓のデザインだけでなく、お墓づくりへの想い、エピソードが重要な審査の対象となっている。

ニューデザイン特別賞には2名が選ばれた。神奈川県川崎市の中井美恵子さんは芝生墓地にメルヘンチックな寿陵墓（生前墓）を建立した。ヨーロッパの彫刻のように、白い墓石に3人の天使がレリーフされている。天使たちが様々な姿態で笛や弦、ラッパを演奏しているデザインで、お墓の前に立つと清らかなメロディが流れてくるのを感じる。



もう一人のニューデザイン特別賞は、群馬県高崎市の橋本祐樹さんが受賞した。サッカー少年だった息子のためにサッカーコート、スタジアム、ボールなどの「サッカーボール型お墓」を建立した。愛していた息子への熱い思いが感じられるお墓だ。「キセキ」

の文字が彫られ、いつかまた息子に会えるキセキを信じて、と思いを語る。

熊本県合志市の白石和也さんのお墓は 24 歳で亡くなった息子のお墓。息子を失い憔悴しきっていた中、友達の多かった息子のため、お参りで訪ねてくれる友達を温かく迎えるためのお墓づくりを目指す。それが今を生きていくための目標になったという。墓石には息子から私たちに、私たちから息子にと、お互い一番伝えたい言葉として「ありがとう」を刻んだ。今でもたくさんの友達がお参りしてくれ、胸が熱くなるという。



長崎県雲仙市の荒木博文さんは、「ありがとう」を刻んだお墓だが、ひとひねりした「ありがとう型お墓」だ。「ありがとう」のひらがなが漢字で「夢」と読めるようなデザイン文字を持ち込み、墓石に彫ってもらった。

宮城県登米市の芝原哲男さんは、東日本大震災で傷ついたお墓を「おかげさま型お墓」に建て替えた。家族が仲良く、健康に暮らしていけるのも、ご先祖様をはじめたくさんの方々「おかげさま」だと常々感謝している。「ありがとう」と同じく「感謝型お墓」に分類されようか。



天然石を使ったお墓では群馬県富岡市の吉井伍男さんのお墓が入賞した。47 歳で先に逝ってしまった息子のために自然石に「卒業証書」と刻んだ。かなり独創的だった息子を、この世から「卒業証書」で送り出し、ワンランク上のあの世での活躍を祈るという想いが込められている。



熊本県八代市の岩本光照さんは、高校卒業間近で亡くなった次男のお墓で入賞した。「森を作り、育て、活かす」仕事をしたい、という願いを抱いていた息子のイメージに合わせ、大木で止まる何匹もの森の番人ふくろう達が見守ってくれるお墓だ。

栃木県塩谷郡の谷澤正一さんは、亡妻が好きだった北海道の荒涼とした場所にでも散骨しようか、などと漠然と考えていた。ところが娘たちの「お参りする場所が欲しい」との一言で、お墓をつくることを決心。庭をイメージし、墓石は真四角の石に窪みをつけ「宇宙」を象徴した。



大阪府寝屋川市の中川隆雄さんは、横型墓石に「静偲」と彫り、スタイリッシュなお墓を完成させた。なにより嬉しかったのは、息子の嫁に「お父さん、素敵なお墓ですね」と言われたことだと語る。



宮城県仙台市の石川博子さんは、亡き父の孫にあたる息子の高校生にデザインを任せた。さすが高校生らし



いフレッシュな発想。仙台ゆかりの伊達政宗公の兜飾りをモチーフにしたデザインを考えた。お墓を建てた 2017 年は伊達政宗公の生誕 450 年にあたっていた。

兵庫県姫路市のお寺、龍源寺は、門徒の方ならどなたでも、納骨できる共同墓を建立した。彫刻家に依頼して制作した芸術的、哲学的な「空間のメヴィウス」。1ヶ所をねじりまたもとの所にもどってくる「メヴィウスの帯」をテーマにしている。



長崎県長崎市の小崎侃（かん）さんは、亡き父が漂泊の俳人、山頭火の大ファンだったため、山頭火の句「何を求める風の中をゆく山頭火」とした。素朴で味わい深い木版画や彫刻などの作品を制作する小崎さん自身、500 点を越す山頭火をテーマの版画を制作している

大阪府茨木市の船生義己さんは、北海道出身を連想させる雪の結晶と、2年前に亡くなった飼犬が家族の心に残してくれた思い出の足跡として、犬の足のデザインを墓石に刻んだ。



宮城県仙台市の今野宏美さんは、亡くなったご主人や父母に私たちを見て欲しい、見守って欲しい。またいつか私も子供たちを見守っていきたい。光を通して透き通るガラスなら、そんな願いも叶いそうな気がしてスタンドグラス入りのお墓を建立した。

宮城県名取市の沼田智幸さんは、東日本大震災で家族 3 人を失ってから 7 年、「まだ」でも「もう」でもなく、「今でも」の出来事だという。愛する家族を自分の中で永遠のものにするために、家族への「永久欠番」のお墓を建てる決意をしたという。夏の花火大会など仙台の四季折々の風物詩を 4 枚のスタンドグラスに制作、お墓に組み合わせた。



宮城県遠田郡の鈴木勝男さんは、亡き妻と自分の誕生月に咲く花をお墓に刻んだ。「これからも私たち夫婦は仲良く過ごしていきたい」、そんな気持ちを込めたお墓だという。

新潟県魚沼市の福中康之さんは、20 歳代に 2 人の幼い子を残して逝った妻の供養に、ふんわりと降り積もった雪のように、赤ん坊を優しく包む真綿のおくるみに包まれるイメージのお墓を建立した。



大阪府和泉市の長宮英夫さんは、庭好きだった亡き妻のために庭風のお墓を建立した。庭風の飛び石が敷かれ、庭石が置かれている。そこに石で作った白い蓮の花が、彩りを添える。

大阪府堺市の横山弘さんは、大手電機メーカーに勤め、その後独立して系列の家電販売店を運営してきた。何度か表彰される機会があったが、偶然なのかなぜか「和」と書かれた額縁をもらうことが重なった。そこでお墓は「和」を刻み、さらに「ありがとう」も彫刻した。



今、「墓じまい」が話題になっているが、お墓を通して家族や先祖へ感謝や供養を行い、これからの自分たちの未来を見守ってほしいと願う気持ちは失われていない。

ニューデザイン賞の谷澤正一さんは、散骨でもと考えていた人が、娘さんの「お参りする場所が欲しい」との一言で、お墓をつくることを決心する。

白石和也さんは亡くなった息子のお墓を作ることが、今を生きていく目標になった。今でもたくさんさんの友達がお参りしてくれ、胸が熱くなる。

中川隆雄さんは、完成した墓石の前に、息子のお嫁さんから「お父さん、素敵なお墓ですね」と言われたことに感涙する。

こんな想いを込めたお墓づくりのエピソードを聞くと、お墓づくりは生きがいであり、新たな希望を生み、家族の絆を強くする絶好の機会であることがよくわかる。

以上の件に関する取材のお問い合わせは

■一般社団法人 全国優良石材店の会

東京都品川区上大崎 3-8-5 IRビル 6階 (〒141-0021)

電話 03-5423-4014 FAX 03-5423-4050

事務局長 山崎 正子 (携帯電話 090-2669-5667) E-Mail [zenyuseki@triton.ocn.ne.jp](mailto:zenyuseki@triton.ocn.ne.jp)